



近所に魔女が やってきた

10月8日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

10月8日のおはなし「近所に魔女がやってきた」

ついこの間まで誰も住んでいなかったのに、新学期が始まるとその部屋には誰かが住み始めたらしい。道路に面した窓に派手な色のカーテンがかかっている、「かっとなだセンスしてるよな」というのがマコトの意見だった。住んでいるのは女の人だな、とぼくは思ったんだけど、そのことは口に出さなかった。たぶんあとの2人もそう考えていたと思うけど、やっぱり口には出さなかった。

ぼくらが学校に行く時間にはいつも人気（ひとけ）がなく、ケンちゃんが塾の帰りに見たら夜もまっくらで、やっぱり人気がないらしい。いつ家に帰って来るんだろう。人気がないだけで本当はあの中でひっそり暮らしているのかも知れない。昼間はずっと眠っていて夜になると目覚めて出てくるのかも……。理由はよくわからないけど、ぼくらはその部屋に住んでいるのはフツーじゃない人だと思うようになっていた。

でもそのうちぼくらはその部屋の住人を自分の目で確認することになる。それぞれが別々の機会に。マコトは土曜日の朝早く見たという。ケンちゃんは学校帰りにケーキ屋の箱をぶら下げて歩く人に会ったという。ぼくが見たのは夜で、道路とは反対側の窓のカーテン（こっちはそんなに派手じゃない）を閉める女の人の姿だった。その人はしばらく外を見てからカーテンを閉めて、電気を消して出ていった。

「やっぱり女だったな」マコトが言った。「そうだと思ってたんだよ、おれ」
今までそんなことは一言も言わなかったくせにマコトがそう言う。ケンちゃんはそれには答えず、
「なんか意外にフツーっていうか、フツーじゃなくないって言うか、そんな感じだったよな」と言った。するとマコトが反論した。
「そうか？ かなりフツーじゃない感じだったぞ。髪短くて歩き方も迫力あってさ」
「それ見間違いだよ。おれが見た時は髪、肩くらいまであったぞ。確かに足音をコツコツコツツさせて迫力はあったけど」
「違うよ。もっとゆっくりした調子で歩くんだよ」
ぼくが見たのは背中に届くほど長い髪で、身のこなしはもっと静かなものだった。
「ヨータはどうなんだよ」
「うん」考え出すと自信がなくなってきて髪のことや歩き方のことは言えなかった。「女の人だった。年は若いのか年なのかよくわかんなかった」
「そうそう。年はわからねえよな。若くはない。うん。若くはないと思うんだよ、あの迫力じゃ」
マコトがそう言うと、ケンちゃんも続ける。
「年齢不詳ってやつだな」
「なんだそれ」
「年がよくわからないって意味だよ」
「じゃあ、そう言えよ」

実を言うとぼくは時間が許す限りその部屋を見張っていた。中の様子はまるで見えない。でも一度だけちらっと目を疑うようなものを見た。シャンデリアだった。うちの近所には絶対にありえないような妖しいシャンデリアだった。ロウソクとかを立てるようなやつだ。でもこれも本当に見たのか自信はない。一瞬見えただけだし、その建物はおよそシャンデリアなんかに縁があるとは思えなかった。

時々不思議な音楽が流れてきたりすることもある。そして見るたびに姿が変わる女の住人。ぼくはおかあさんからもらったキャンパスノートの表紙に「魔女日記」と書いて、自分が見たことを記録に留めることにした。どうしてマコトやケンちゃんに黙って一人でそんなことを始めたのか理由はわからない。塾の帰りの10分間くらい。夜の10時ごろ、建物の裏側の暗がりとその部屋の様子をうかがうのがぼくの日課になった。

ある晩ノートを取りだしていると、だしぬけに後ろから声がした。

「何をしているのかな少年」

低い女の人声だった。ぼくはほとんどもらしそうになった。振り向くと何とそこには3人の魔女がいた。あっという間に取り囲まれ、ぼくは逃げることもできなくなってしまった。

「『魔女日記』？」さっきの声が言った。しまった見られた！ 髪短い魔女が続ける。「話を聞かせてもらうよ」

「こんなところも何だから、中に案内しよう」肩くらいまで髪のある魔女が言った。

「男子禁制なんだけどね」髪長い魔女が言った。

こんな風にして、ぼくと3人の魔女の2年間は始まったんだ。

(「魔女」 ordered by オネエ-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブックログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるのですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験

済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上げてまいりましょう。

近所に魔女がやってきた

<http://p.booklog.jp/book/35042>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35042>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35042>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.